

京都大学大学院理学研究科附属花山天文台の文化財的価値についての所見

石田潤一郎（京都工芸繊維大学名誉教授）

1) 建設経緯 花山天文台は、昭和4年（1929）に当時の京都府宇治郡山科町大字北花山（現在の京都市山科区花山大峰町）に建設された。施設は本館、別館、太陽館、子午線館の4棟が主要なもので、他に宿舍等がある。主要4棟のうち、太陽館は戦後に建て替えられ、他の3棟が残る。

京都帝国大学理学部附属天文台は大学構内にあったが、周囲の市街化による光害に避けるために、大正15年（1926）に移転の計画が本格化した。翌昭和2年（1927）5月に花山山の敷地の提供を受け、同地への移転新築が決定する。以後、昭和3年（1928）にかけて設計が進められ、同3年7月25日に起工し、同4年（1929）7月に建築としては竣工を迎え、観測機械の据え付けを待って、同年10月18日に落成式を迎えた。『近代建築画譜』によると竣工は4年11月15日とされる。工費は10万円という。

2) 構造規模 本館は鉄筋コンクリート造でいわゆる壁構造の手法を採用する。地上3階、地下1階、竣工時の面積は延176.4坪。別館は鉄筋コンクリート造で、本館同様、壁構造を採用する。地上2階、延20.7坪。本館、別館とも半球ドームを戴き、ドーム骨組みは鉄骨トラスで構成し、亜鉛板を葺く。子午線館は木造平屋建て、瓦棒葺き、延10.0坪である。

3) 仕様 本館と別館の外壁はリソイド仕上げで、竣工時には「白に近い淡青色」であったという。内壁・天井は主にプラスター塗りで仕上げられる。子午線館は下見板張り、ペイント塗り。床は当初はモルタル仕上げと見られる。

4) 設計者・施工者 設計は京都帝国大学営繕課。設計図書には「検査」欄に技師の大倉三郎、「決定」欄に武田五一（昭和4年1月まで建築設計顧問、その後、5年6月まで営繕課長）の印が認められる。大倉三郎は『新建築』第6巻第3号に「花山天文台に就て」を執筆しており、また「大倉三郎」の署名のある透視図を掲載していて、大倉が設計の担当者であったとみて間違いない。

大倉三郎は明治33年（1900年）2月24日に京都市に生まれ、同志社中学校、第五高等学校を経て、大正9年（1920）に折しも創設された京都帝国大学建築学科に入学する。同12年に第一期生として卒業し、宗兵蔵が主宰する宗設計事務所に入所する。宗事務所では1年余の兵役を含めた4年間に20件ほどの建築の設計を担当する。現存作品では「生駒時計店」（大阪・1930、脇永一雄と共同）、「旧鴻池銀行七条支店」（京都・1927）が知られる。

昭和3年1月に京都帝大営繕課に転じ、吉田キャンパスの高層化と学外施設の建設という課題の解決を主導して引き受ける。昭和15年（1940）に台湾総督府技師に転任、戦後は摂南工専、京都工芸繊維大学、西日本工業大学で教授を務める。昭和58年（1983）死去。

大倉が京大営繕課時代に担当した作品のうち現存するものとしては、当花山天文台のほか、高槻農場本館（1930）、農学部演習林本部事務室（1931）、附属病院産婦人科病棟（1931）、法経新館（1933（西翼部））などが挙げられる。本務以外の作品では、日本基督教団鴨東教会（1934）、龍谷大学附属図書館

(1936)、同志社大学明德館（1952）が知られる。また先代の新島会館(1932)も大倉の設計による。京大キャンパスの建物によく示されているように、歴史様式からモダニズムまで作風は幅広く、用途や置かれた環境に応じて巧みに意匠を使い分ける才腕を備えていた。

施工者は田井松之助で、ドームの施工については川崎造船所によった。

5) 文化財的価値 現存する近代の天文台建築で、国登録有形文化財となっている遺構には、東京商船大学旧天体観測所（第1・第2観測台）（1903）、国立天文台大赤道儀室他全10棟（1921～1930）、旧倉敷天文台スライディンググループ観測所（1926）が知られる。当花山天文台はこれらと並ぶ稀少な作例である。

意匠はきわめて特徴的である。一般的に建築物の立面では、それを構成する各部位（軒、外壁、基壇、窓、あるいは高欄など）がそれぞれ明確に分節される。しかし、本館と別館においては、各部分が連続し、一体化していて、建築全体が単純な幾何学形態を呈するように構成されている。こうした形態の抽象化は1920年代からヨーロッパにおいて形成されるモダニズム建築の最大の特徴である。この動向を日本において具現化したきわめて早い例といえる。1930年代半ばから日本でモダニズム建築が展開する中で、直方体へ形態を抽象化する例は比較的多いが、円筒形は稀少であり、その点でも貴重である。

横長の長方形をなす窓と手摺りの開口の意匠、あるいは別館の出入り口に見られる、開口をまたぐように庇を付ける手法も斬新である。ドイツ建築に先例を見出せるが、よく咀嚼して、全体の抽象形態化に大きく寄与している。このほか、本館2階のマッシュルーム構造の天井、別館出入り口前の台形の障壁など、特徴的な造形を各所に認められる。

子午線館は垂鉛引き鉄板の瓦棒葺きによる屋根を極度の緩勾配にした手法が注目される。これは、同室の形態を、円形の本館・別件と対比をなすように、直方体へ還元することを目指したためとみられる。

当天文台の建築群は、抽象的な形態と合理主義的な建築観を追求するモダニズム建築という変革の時代の意匠をよく示す作例として貴重である。

一方、技術的には鉄筋コンクリートの壁構造（大倉三郎はベアリング・ウォールと称する）の先駆的な作例として注目される。鉄筋コンクリート構造は柱・梁の軸組構造が中心であり、壁で荷重を支える壁構造は戦前には少数の作例しかない。壁式RC構造が広く普及するのは、戦後の昭和22年（1947）の都営高輪アパート以降のことである。それをはるかに遡る時期に実現していることは特筆に値する。なお、大倉三郎の師である武田五一と藤井厚二がともに大正末から住宅で壁式構造を試みており、大倉はこれに触発されて新技法に取り組んだのかもしれない。

参考文献

- ①『新建築』第6巻第3号（1930年3月）
- ②『近代建築画譜』（同書刊行会、1936年9月）
- ③『天界』第4巻第103号（1929年10月）
- ④NPO法人古材文化の会 伝統建築保存・活用マネージャー会『“京都を彩る建物や庭園”認定候補調査報告書 京都大学大学院理学研究科附属花山天文台』（2014年）